

園番号 718

令和4年度 奈良市立学園南こども園 研究実践概要

園長名 林 三代
全園児数 205名

1. 研究主題

「子どもと子ども、保育者と子ども、
みんながつながる楽しさを感じるために保育者が今できることを探る」
～安心できる人的環境の中で～

2. 研究年度 初 年度

3. 研究主題設定理由

昨年までの「遊びこめる環境」についての研究の成果を話し合う中で、子どもたちに必要な人的環境とは何かという観点がでてきた。本園は、交通の便も良いため、勤務地も様々で、長時間保育の園児がほとんどである。子どもの姿に合わせたカリキュラム・援助の方法を職員間で検討し、保育者にできることは何かを探っていくことにした。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

・安心して過ごし、人とのかかわりを楽しめるこどもを育むための様々な保育内容と援助の方法を探る。

②研究の重点

・0歳からの保育の中で、子ども達が人と関わる心地よさを感じられるために園での人的環境を考えたり、家庭との連携を工夫したりして、愛着関係の基礎を育むことを大切にしていく。

・人とつながる経験や遊びを充実させるための保育内容や援助の方法について研究する。

③活動の方法

【0歳児】 ～ずっと一緒にいてほしい。を満たすために～ 4月

入園当初、保育室の色々な玩具に興味をもち楽しく過ごしていたA児。慣らし保育が進み保育時間が長くなると泣くことが増えた。保育者はA児が安心できるように向き合い一緒に遊んだり抱っこしたりしていたが、他の担当児にかかわる度に大泣きしアピールする姿が続いた。特定の保育者が担当しながらも、安定できないA児をどう安定させたらよいか、担任全員で検討した。

特定の保育者と安心して過ごしてほしい。入園当初の様に楽しく遊んでほしい。という思いから、『Aちゃんディ』=特定の保育者がA児から一時も離れることなく一緒に過ごす日を設けることにした。そのために、A児以外の食事やおむつ替え等を他の保育者と協力しながら、1対1でA児に向き合うこととした。その後Aちゃんディを数日設けると、再びA児が自ら遊び、保育者の言葉を感じてコミュニケーションが取れるようになり笑顔が増えた。A児が安定することで、他児も落ち着いて過ごすことができるようになった。

〈考察〉

0歳児に限らず園児は保育時間が長くなることで、家庭で過ごしていた時との生活の変化を感じ不安定になることが多い。子どもたち一人一人が伸び伸びと自分らしく過ごすためには、保育者や生活の場で安定し、いつも自分のことを見てくれているという家庭らしい安心感が必要であると考えた。育児担当制によりそれが満たされるのだが、さらに保育を細か

く見直し複数担任で協力し合うことで子ども一人一人の安定や成長につながることを実感することができた。

【1歳児】 「一緒にかんぱい！」 6月

入園当初、初めての園生活に不安な様子で1日中泣いて過ごす期間が長かったA児。保育者が色々な遊びや玩具に誘うが、あまり興味を示さなかった。特定の保育者が側に寄り添い優しく声をかけながら、抱きしめたり、ひざにのせて『一本橋こちょこちょ』や『バスにのって』などのふれあい遊びをしたりすると、表情が和らいできた。ジュースの玩具を手渡してみると、興味を示し受け取るA児。保育者が「かんぱい！」と言うと、A児も一緒にジュースを飲む仕草をするようになり、特定の保育者と共に遊ぶ姿が見られるようになった。ある日、A児がジュースを持っていると、B児が来て、二人で顔を見合わせた。「AくんとBくん、同じジュースを持っているね」と保育者が声をかけると、二人はにっこりと笑った。

〈考察〉

なかなか園生活に慣れず、常に緊張した様子のA児だったが、特定の保育者が本児の気持ちを十分に受け止め、丁寧にかかわることにより、A児の中に保育者への信頼感や安心感が生まれ、情緒が安定していった。保育者との愛着関係ができたことにより、周囲へ興味や関心を向けられるようになったと考える。

【2歳児】 「おうち」「おうち」「〇〇、くるま」

4月当初は、自分から遊びに入ることが難しかったり、遊びだしてもすぐにやめてしまったりする姿が見られた。そこで、したい遊びを自由に選べるように素材や環境を工夫し、一人一人の子どもの姿を認める関わりを大切にしてきた。

子ども達が、牛乳パックの積み木を直線状に並べて渡って遊んでいた。そこにA児が来て、平面から次々にパック積み木を囲いのように立て始める。B・C児もA児の姿に気付いて、A児と同じように積み木を立てて置き始める。囲いの中にA,B,C児が入る。保育者は、A,B,C児らが平面から立体にして工夫している姿を受け止め「積み木、今度は立ててみたんだね。」と声をかけ、「何が出来るんだろう」と期待感を伝える。「これなあに？」と尋ねるとA児は「お家」、B児は「お家」、C児は他の遊びで使っていた新聞紙の輪を取りに行きハンドルに見立てて動かしながら「〇〇、くるま」とそれぞれ保育者に伝える。保育者は「いいね、楽しそう」と肯定しながら見守り、A児・B児はお家に見立てて出入りしながら遊んでいた。



〈考察〉

保育者の援助として、複数の遊びの中から子ども達一人一人が主体的に遊びを選べるようにし、その中でも時折他の遊びに移ったり部分的に参加したりする姿も受け止めながら満足感が得られるまで繰り返し楽しめることを大切にしてきた。また、この場面では子ども達のイメージが広がるよう何を作ったか尋ねたが、それ以外の声掛けは敢えて控えめにする事で子ども達同士のやりとりが展開していくよう見守った。このように、子どもの心が動く瞬間を捉え、そばで共感したり励ましたりすることで、遊びの中で成功体験を積み重ね、新たなことにも挑戦するといった変化が見られたと同時に、自信や意欲につながっていったと考えられる。

【3歳児】 「ごちそういっぱいや」 11月

入園進級当初は、保育者への愛着が強く、依存する気持ちが強かった。傍を離れず一緒に遊んでほしい姿が多く見られた。また遊びを見つけられず、走り回ったり場所を転々としていたりしていた。そこで、愛着を受け止めながら、一人一人が楽しいと思うことを見つけられるような関わりを心掛けていった。

秋には、数人の子どもが砂場で、泥水のジュースを作ったり、色々なお皿に砂を入れたりして思い思いに遊ぶ姿が見られた。繰り返しナイフで草を切っていたA児が「これ切れへんわ」と言うと、B児が「これの方が切れるで」と、以前切りやすかった草を渡した。その草を切ってみたA児は「ほんまや」と目を輝かせている。保育者が「さっきの葉っぱ、かたかったね。いいのもらったね」というと大きく頷いている。「もっととってこよう」とB児が花壇の草花を取りに行くと、「ぼくも」と一緒に何人かが取りに行く。各々に欲しいも

のをとってきて再び遊び始めた。C児が、取ってきた小花やハートの形の草をご飯に飾りつけ「できた、みて」と大喜びしている。周りの子どもも「うわあ、きれい」「ごちそういっぱいや」と会話が弾んでいる。「コックさんみたい。おいしそう」と声を掛けると、「たべて」と保育者を招いた。椅子に座ると、ごちそうが並べられた。「素敵、いただきます」というと、保育者の様子を興味津々にのぞき込んでいる。おいしそうに食べると、大喜びになり「もっとコーヒーいりますか」「ドングリスープもあります」とごちそうづくりを楽しんだ。

<考察>

子どもの遊びの楽しさに共感したり、見守ったり、その楽しさを周りの友達に知らせたり等の取り組みを積み重ねていくことで、少しずつ子どもたちが自分で遊びを見つけ夢中になって楽しむようになっていった。そして一人一人が自分のしたい遊びを見つけて遊ぶ中で、友達との関わりを心地よく感じ、会話したり、友達のしていることに興味を持ったり、同じイメージで遊びを楽しんだりする姿が見られた。事例を通じて自ら環境にかかわりたい遊びを楽しむ姿を、子どもと同じ立ち位置で一緒に楽しみ、共感し、必要に応じて提案したり援助したりすることが大切であることが分かった。

【4歳児】 「みんなでがんばろう！」 11～12月

生活発表会に向けてお話遊びを進めていた時、セリフがバラバラになったり、友達が前で表現している時も喋ったり寝転んだりするなどの姿が見られた。周りの友達のことを意識できるように声をかけたり、クラスみんなで取り組んでいる意識をもてるように励ましたりしたことで、少しずつ姿が変わり始め、友達と出番や小道具を付けるタイミングを教え合う姿や「せーの」と掛け声をかけセリフを揃えて言おうとする姿が見られるようになった。みんなで頑張ろうとしている姿を十分に認めたり、当日は保護者にもたくさん褒めてもらったりしたことで、「みんなで気持ち揃えたからできた」「褒めてもらえて嬉しかった」と、発表会への取り組みが自信につながった。

その後も、友達が困っていると教える姿が見られるようになったり、友達のいいところを見つけ認めたり自然と拍手が起こったりするなど、少しずつクラスの仲間として友達のことを考えられるようになってきている。

<考察>

運動遊び参観や生活発表会などの行事を経験し、みんなで行う活動に楽しさを感じたことで、クラスとしての意識が芽生え始め、友達が困っているときに教えたり助けたりする姿が見られるようになった。また、クラスの友達の良いところを認め合う姿を大切にし、つながり合う喜びや嬉しさが実感できるようにしていきたい。

【5歳児】 「作戦会議をしよう」（4月～12月）

自分の思いが強く、他からの助言や、友達のアイデアを聞き入れるのが難しい子どもや、反対に考えを上手く表現できない子どもがおり、話し合いで遊びを進め、皆で楽しむことがうまくできなかった。色々な方法を考え試しながら友達と一緒に成功させていく過程を楽しむ経験をして欲しいと考え、遊びを進めてきた。

1学期は、これまで経験しにくかった触れ合う遊びやつながる遊びを取り入れた。『なべなべそこぬけ』では2人組だけでなく全員で一重円になり手をつないで跳んだり、回ったり、バランスをとったりして遊んだ。片足立ちでバランスを取る時は、一人がふらつくと、両隣、その隣へと影響し「〇〇ちゃんのせいで転んだ」という捉え方をする子どもが多かった。「ちゃんとやって」と苦手な子を責める声もあったが、成功するにはどうすれば良いか子ども達に投げかけると、得意な子の「じゃあ僕が〇〇君の隣に行くわ」という声をきっかけに子ども達同士で順を決めて移動し挑戦を繰り返した。とうとう成功した時には皆で手を叩き大喜びだった。皆で一つの目標をかなえた達成感や一体感を感じる経験となり、その後の活動の基になったと感じている。

2学期には、運動会、遠足、発表会とクラスとして取り組む活動が多かった。運動会のリレーでは、抜かれたり、負けたりすることが受け入れられず、バトンを投げたり、トラックから逃げて行ってしまったりする子どもがいて、ルールを守らない友達に腹を立て責める姿があった。その気持ちも十分理解でき、認めて皆にも共有したうえで、皆が十分力を発揮し、やりきる経験をして欲しいという思いから、クラスの目標を「皆が走ってゴールまでバ

トンを繋ぐこと」とし、全員で作戦会議を何度も繰り返した。「なぜバトンを投げるんだろう」「どうすれば最後まで走れるのか」「走る順をかえたらどうか」。クラスには速く走れる子、ゆっくりな子、大きい子、小さい子等、色々な友達がおり、子ども達は、それをよく理解して一生懸命に考えていた。当日、作戦が上手くいき、喜びを大いに感じている子ども達の表情を見ることができ、皆で乗り越えられて良かったと感じた。

〈考察〉

日々、友達と一緒に遊び、友達のアイデアを聞いたり、その考えの良さに気付いたりできるように機会を作っていくことで、一人一人の得意や苦手を受け入れ、その上でお互いが納得できる方法を見つけようとする姿に成長を感じた。まだ、友達同士の関わりが上手くいかず、皆が嫌な思いをすることもあった。しかし、保育は



はなく、友達と

考え一緒に進め、目標を達成できたという成功体験を

くことで、子ども達がさらに目標に向かって積極的に活動する姿に

ている。

【長時間保育】 「いっしょにあそぼう」 12月

3、4、5歳児が合同となる夕方、3歳児がしていた坊主めくりを4歳児のA児が嬉しそうに見ていた。しかし、その回が終わると、充分楽しんだ3歳児は、次の遊びへと移っていった。空いた椅子に座って、坊主めくりの箱を抱えていたA児は、しばらくすると涙を流していた。保育者が、別のグループに関わりながら何度か声をかけるが、自分からは一緒にしようとうながることができない様子だった。A児の様子に気付いた5歳児B児が「どうしたの？ やりたいの？」と声をかけ、A児がうなずくと「いっしょにしようか」と同じ机の椅子に座り、遊び始めた。「これでいい？」とB児が確認しながら2回ほど坊主めくりをした後、アレンジした遊びをはじめ、声を出して笑い合いながら楽しむ姿があった。

〈考察〉

もっと友達と関わって遊ぶことを楽しんでほしいと思い、少人数での交流を大切にすることから進めていった。保育者が一緒に遊びながら「順番はじゃんけんで決める？」「お姉ちゃんに聞いてみる？」と仲立ちをしていくことで、学期が進むごとに、大きい子からの「教えたらか？」「こうするねんで」とやさしい声かけが聞かれるようになった。自然に好きな遊びの場所での交流がみられるようになっていく。お迎えで友達が減っていく時間帯でもあるが、楽しいなと感じられるように、保育者が友達同士のつながりを意識した言葉かけや関わりをすることが大切だと感じた。

5. 研究の成果

- ・どの年齢であっても保育時間が長くなることで、家庭で過ごしていた時との変化を感じて不安定になることが多い。一人一人に対して、保育者との関係や生活の場で家庭的な環境が必要であると改めて感じた。
- ・ゆったりとした時間の流れの中で、したい遊びを存分に楽しみ、安心感や満足感を得られることが大切であると思った。また、保育者や友達に認められ共感されることで、自信や意欲へとつながり生き生きと過ごす土台となっていくことが分かった。

6. 今後の課題

- ・長時間保育を必要とする子どもが多い本園では、安心感や満足感を得られる生活や遊びについて取り組んでいくことが必要である。
- ・0歳からの連続した発達をおさえ、子ども達が人とつながる楽しさを感じられるように、まず一人一人が生き生きと過ごすための保育者の関わりについて、職員間で深めていくことが大切である。
- ・日々の取り組みをいろいろな形で保護者に伝えて、ともに育てていくことにつなげていきたい。